

多言語多文化研究に向けた複合型派遣プログラム
派遣研究報告書

2013 年 2 月 12 日

派遣者氏名（専門分野）	青木佑介（フランス文学）
-------------	--------------

下記のとおり報告します。

記

研究テーマ	マルグリット・デュラスの作品における個と集団の対峙 『ヒロシマ私の恋人』戦争の記憶を通して
-------	--

派遣期間

2013 年 1 月 12 日 ～ 2013 年 1 月 27 日

訪問 研究 機関	国	都市	訪問機関	受入研究者
	フランス	パリ	Bibliothèque du film	
	フランス	パリ	IMEC パリ事務所	
	フランス	カン	IMEC L'Abbaye d'Ardenne (カン図書館)	

派遣先で実施した研究内容

①調査概要

二十世紀の出版物に関する資料を収集、保管する IMEC（現代出版物保存協会）にてマルグリット・デュラス (Marguerite Duras 1914-1996) の草稿資料の調査を行い、また映画作品の資料を収集、保管する Bibliothèque du film (映画文献資料図書館) にて、日本で入手困難な彼女の映画作品を閲覧した。

②デュラスと草稿資料

デュラスは亡くなる前年に自身が所有していた作品の草稿、関連資料を IMEC にあずけ、それらの資料は 2006 年に分類、整理を終えた。そうした草稿資料を扱った研究、出版が間もなく開始され、2006 年には彼女の戦争体験を綴った『苦悩』(1984)の草稿を収めた『戦争ノート』が、また 2014 年の生誕 100 年を前に刊行を開始された全集では、一部の作品で草稿が引用されている。資料の整理完了年からも分かるように、デュラス研究における草稿の使用はまだ開始されたばかりであり、84 箱に及ぶ資料の全容が一般に公開されているわけではない。また資料のカタログもネット上で閲覧することはできず、IMEC に直接赴かなければその内容を知ることができない。

デュラス研究における草稿資料の重要性は次のような点から見えて来る。彼女は『エクリール』(Écrire, 1993)と題したエッセーにおいて、草稿を捨てたという作家の言葉を信じないと語っており、この言葉はそのまま、彼女自身が草稿を大切に保管していること、またその資料的価値を自身が認めていることをうかがわせる。実際に、84 箱に及ぶ資料は、IMEC が作成したカタログだけで 300 ページを超えており、彼女が草稿を大切に保管していたことは明らかである。しかし、なぜ草稿資料の重要性を公言するほど、デュラスはそれに価値を置いていたのだろうか。この問題は彼女の作品の特徴、傾向から

うかがうことができる。デュラスは単語やフレーズなどにおいて繰り返しを多用する作家として知られている。しかし、そうした繰り返しは、テーマのリフレインに留まるのではなく、彼女自身によるテーマの再解釈という問題を含んでいる。例えば、幼少期の体験を基に書かれた『太平洋の防波堤』(1953)は『愛人』(1984)そして『北の愛人』(1985)として二度書き換えられ、繰り返された作品の代表例と言えるだろう。更に、複数の作品に登場するアンヌ・マリー・ストレットルという名の女性、インド連作と呼ばれる、『インディア・ソング』、『副領事』、『ガンジスの女』の三作品など、自身による諸テーマの再解釈は彼女の創作活動において重要な位置を占めているのである。つまり、作品の草稿は他作品を書く上で彼女自身にとっても資料となっていた可能性が考えられるのである。また、簡素な文体を特徴とする彼女の作品を読む上で、決定稿と草稿を比較、検討することは、彼女が書き表そうとしたテーマを多面的に見る機会を与えてくれるため、問題点を深く探るための有効な資料となる。

③調査内容

今回の調査では、まずパリにある IMEC の事務所にてカタログを閲覧し、資料の全体像を把握するとともに、その一部を転記した（複写はできない）。その後、カン郊外の資料保管所兼図書館にて、*Hiroshima mon amour*(1959)を中心に実際の草稿資料調査を行った。個人的な物語と、社会的、集団的な出来事が、時間的、「地理的、思想的、歴史的、経済的、人種的」な隔たりを超えて結ばれる物語において、デュラスが何をそうした領域を超えうるものとして描いているのかを検討した。本作はアラン・レネに依頼され、映画のために書かれたシナリオである。映画公開の翌年には映画の基となったシナリオが出版され、本書は映画とシナリオの間の違いが読者にも理解できるように配慮されている。その前書きでデュラスは、制作過程においてレネや G・ジャルロと彼女の間で交わされた会話を報告出来ないことを残念であると断りながら、本作が彼女一人で行った仕事ではないと述べており、決定稿に至るまでに複数回の書き換え、書き足しが行われたことをうかがわせる。また、定められた製作期間の関係上、最初原稿（未公開）を基に撮影が開始されたが、その後、原稿の書き換えと撮影が同時進行であった経緯がある。こうしたことなどから、撮影開始前に書かれていた物語と最終的な決定稿の差異を確認し、最後まで残されたアイデア、また書き換えられた箇所を検討することは、想定された領域と超越の問題を読み解く重要な手掛かりとなるだろう。今回の調査では、物語として完成された最初の草稿に焦点を絞り、その全文を転記して持ち帰った。

映画文献図書館での調査では、日本で未発表、未発売、または絶版のデュラスの映画作品を閲覧した。言葉がそれとして生み出す印象に重点を置き、言葉を純化させようと試みたデュラスは、次第に文体を簡素にして行く。このことは、言葉を尽くすだけでは語り得ないものを、小説、映画、戯曲の領域を越えて表現することへと繋がって行く。文字によって喚起される視聴覚イメージではなく、映像という視覚的な範囲の定められたイメージにおいて、デュラスが何を見せ、何を聞かせるのかを確認、検討した。

研究の当初の目的・計画の達成状況、明らかにできた成果

今回の調査は概ね当初の計画通り完了した。デュラスが IMEC にあずけた資料の全体像を把握するために閲覧したカタログでは、手紙、ノート、写真を含む資料が作品毎に細かく分類され、草稿もその段階毎に整理されており、ネット上で公開されていないとはいえ、希望する資料へのアクセスはスムーズに行えることが分かった。また、作品にも依るが、草稿資料は手書きのメモから、タイプ打ちされたもの、タイプ打ち原稿に手書きで修正を加えたものそれぞれが残されており、デュラスがその言葉通り草稿資料を大切に保管していることが、資料の豊富さや状態から確認することができた。今回の調査では草稿資料の全体像を把握するため、カタログの概要を中心に転記し、調査対象として予定していた *Hiroshima mon amour* に該当する箇所は、資料の状態も全て転記した。*Hiroshima mon amour* の草稿は、当初の予定通り整理番号 cote DRS 18.10 を中心に閲覧し、その全体を転記して持ち帰った。これは映画製作の準備段階のものであり、既に一つの物語として完成しているが、決定稿ではその多くの部分を書き換えられていることが確認できた。詳細な検証はこれからであるが、タイトルに関して確認の取れたことがある。それは、この段階で上げられているタイトル候補は5つあるが、まだ *Hiroshima mon amour* はその候補内に上がっておらず、作中の台詞として用いられていること、またタイトル候補の中には、「個と集団」の問題をうかがわせるものも含まれていることである。このタイトルの問題も作品の内容と合わせて今後検討を行う。

映画文献図書館で閲覧した映画作品では、映像化されることで、作品空間の奥行きが使われ方、そして中心とされたテーマが浮き出て来ることから、登場人物の配置、台詞などにおいて貴重な視点を得ることができた。

派遣後の研究発表の予定

2013 年度の日本フランス語フランス文学会において、今回の調査で得られた資料に基づいた口頭発表を行う予定である。